

明日への伝言

岡田地区新浜の復興の歩みや、まちづくりに懸ける思いなどについて、新浜町内会の遠藤芳広会長にお話を伺いました。



▲建築家・伊東豊雄氏により設計され、かつての住民も集まる憩いの場「新浜みんなの家」

思いを一つに新浜の復興を

震災の津波で甚大な被害を受けた新浜。遠藤会長は「すごい勢いで家の中に水が流れ込み、自宅が直角にねじ曲がって流れ出したんです。近くの小屋に思い切って飛び移って何とか一晩過ごしました。ここは津波が来ないと過信していました」と振り返ります。住民は新浜を離れ、仮設住宅などで生活が始まります。

「震災の年の秋に当時の町内会長を中心に秋祭りを企画しました。みんなで集まれば前に進めるんじゃないかって。住民同士でお酒を飲みながら談笑して、そのときの思いが今につながってる。ここから復興に向けた活動が本格的に始まったんです」。翌年、まちの復興方針などを検討するため「新浜復興の会」が立ち上がります。会は現地再建を目指す住民だけでなく、移転を希望する住民も含めて構成され、遠藤会長がその代表に。「どう話を進めていくか不安でしたが、移転する人も一緒に



▲フットパスの参加者を乗せ、貞山運河を渡る「みんなの船」。海岸との行き来に利用されていた「馬船」と呼ばれる箱形の舟をイメージして制作されました

なって新浜の復興を考えて、助けてくれたと思います。地域への思いを強く感じましたね」。住民へのアンケート調査や意見交換を重ね、平成25年に「新浜地区復興まちづくり基本計画」を策定。「まずは安全・安心に暮らせること、そして訪れたいなる魅力あふれるまちづくりを目指すこの計画には、新浜を愛する人たちの思いが詰まっています」。

人との出会いから広がるまちづくり

計画に基づき、新浜ではさまざまな取り組みが行われています。貞山運河で船遊びや散策をする「新浜フットパス」もその一つ。「大学の先生から新浜に残る貴重な植物の存在を教えてもらったのがきっかけでした。専門家の案内で自然観察をしたり、地域に残る石碑から昔の暮らしを学んだりもしています」。イベントには、大学や市民団体なども参加し、かつての住民も含め、遠方からも多くの人が訪れているそう。また、世界的なアーティストである川俣正氏は、貞山運河にあった民間事

業者が設置した橋が津波で壊れ、撤去されたことを聞き、貞山運河を渡る「みんなの船」を制作するなど、住民との協働でアートプロジェクトを展開しています。「新浜の暮らしは、海とともにありました。海岸の松林は遊び場で、松葉は地区ごとに集めて燃料にした。沿岸部の集団移転により、新浜が海に一番近い集落になったからこそ、今後も海とのつながりを持ち続けたい」と遠藤会長。

さらに、令和2年度からは、市の集団移転跡地の活用事業を利用し、町内会を中心とした管理運営委員会が、グラウンド・ゴルフ場と体験農園の運営を順次開始。新たな交流の場が生まれています。「たくさんの方々の支援があつてここまでできました。そうした皆さんの期待に応えられるような魅力あるまちづくりをしていきたいですね」とほほ笑みます。

新浜の魅力を尋ねると「人の良さは最高。地域のつながりも強いし、きれいな自然もある」と即答してくれた遠藤会長。「人が集まることを続けてにぎわいをつくり、ここに住む人も増やしていければ。何代も続いてきた新浜の暮らしを未来の子どもたちにも引き継いでいきたい」と、力を込めて語ってくれました。



遠藤芳広

新浜町内会

会長

氏

代表

写真